

基調講演 1

大学ライティング・センターを利用する書き手たち
—国語科教育から見た日本におけるライティング・センターの役割—
佐渡島 紗織 氏（早稲田大学 留学センター准教授）

皆さん、こんにちは。佐渡島です。

関西大学の皆様、津田塾大学の皆様、大きなGPを取得されまして、このたびはおめでとうございます。今日は、このような高い席にお招きいただきましてありがとうございます。

トム・ガリー先生は、英語教育の立場から発表されたので、私は、今日は国語教育から見た日本におけるライティング・センターの役割を話したいと思います。タイトルは「大学ライティング・センターを利用する書き手たち」というふうにしてみました。

まず、早稲田のライティング・センターがどのような位置づけで行われているかを御紹介します。

私は、早稲田に来て13年になるのですが、最初に大学院のアカデミック・ライティングの授業がスタートしました。このときにはライティング・センターはまだありませんでした。その3年後にライティング・センターができました。さらにその4年後には、この大学院授業を学部生向けに改良したものを始めました。初年次生向けのオンデマンドの授業です。こういう中で、早稲田のライティング・センターが行われております。

利用状況ですが、1年間で、今分室が1つあるのですが、合わせましてセッション数が2,928です。今ここに、ライティング・センターをお持ちの先生方、事務職員の方、図書館の方等たくさん皆さんいらして、数字を聞くと大きいと思われると思うのですが、利用者数は、頭数だけ数えると1,262人なんです。教員の方も利用してくださっています。ところが、早稲田大学は学生が5万8,000人いるんですね。ですから、たったの2.17%なんです。何と98%の学生は利用し

ていないということになります。本当に愕然としてしまいます。

それで、今日は本当にライティング・センターは日本の学生にとって有効なのかということをおよそ考えてみたいと思います。そして、どうして利用者が少ないのか、これから先日本のライティング・センターはどのような点を目標としていったらよいのかということをお話したいと思います。

そこで、まず日本の大学生の認識についてお話しして、アメリカの文章作成指導、日本の文章作成指導、そしてまとめを話させていただきます。

私は、大学の2年生と3年生を30人ぐらい対面で指導する授業を持っているのですが、5年前に授業の中でこんな調査をしました。「本に書かれている特定の部分を自分の文章の中で紹介しながら自分の意見を述べます。次のどの書き方が適切ですか。」と聞きました。「1. 本の記述を自分の言葉に言いかえて自分の考えの一部として書いてしまう。2. 自分の言葉に言いかえた上で、人が考えているということがわかるように書く。3. 自分の言葉に言いかえた上で、出典を示す。4. 引用をして出典を示す。」このどれですかと手を挙げさせたんですね。そしたら1番は数名いました。それから2番は2割、3番が半数、4番が2割でした。つまり1と2は、出典は示さなくてもいいと考えているわけですね。「どうしてそういうふうに考えてるの。」と1の学生に聞きましたら、「私はずっとこういうふう書いてきた、一度もとがめられなかった。」と言うんです。それから、2番は、「塾でそうするように教わった。」と言いました。そして、全体を見ると8割の学生が引用はしないほうがよいと考えているということがわかります。どうしてと聞いたら、何とこんなことを言いました。「引用をすると、ただ書き写してるので自分の文章が幼稚に見えてしまうから。」と言うんです。ああ、そうなんだ、

日本の大学生はきっとこれがそのままの姿なんだろうなと、みんなこういうふうには思ってるんだろうなと思いました。

そこで、その後、このオンデマンドの初年次教育のアカデミック・ライティング授業をつくったときに、学術的な文章を作成するための基本的な技能を身につける授業ではあるんですけども、とにかく学問をする基本的な姿勢を身につけないといけないなと考えました。そこで、「剽窃をしないために」という第1回の授業の手前にこれを見せたり、参考文献表のつくり方を1回かけて学習させたり、ブロック引用、キーワード引用、こういうところを丁寧にする授業をつくりました。ところが、ある程度の成果は上がっているんですけども、毎回、剽窃をする学生が出るんです。こんなにやってもやっぱり剽窃をしてしまうのです。呼び出しをして20分ぐらいお説教をしないとちゃんならないわけなんですね。そういう学生にどうやってこのレポートを書いたのと私は聞くんですけども、こんなことを言うんです。「ふだんから話題集をつくってUSBに保管している。」と言うんです。こんなテーマでレポート課題が出そうだなと思うテーマについて、いつも複数のインターネットサイトから文章をコピーして置いてあると言うんです。別の学生はこう言いました。「レポート課題が出たら、まずインターネットで検索して、さまざまなサイトを読んで、どの記述が自分の考えに一番近いかを見て、それをコピーする。」と言うんです。これは正直な回答だと思うんですけども、とにかく何のために学問をしているのかということが全く理解できてないんだなとわかります。

つまり、これまでに発表されてきた先人たちの研究成果は大いにそこに盛り込んでよいということを知らないわけなんですね。それから、誰がどこで何と言ったかをそのまま報告すればいいんだということも知らない。そして、先人たちの築い

た知識の穴とか不足を埋めるべく自分の考えを主張すればいいんだということも知らずに大学で勉強しているんだなあということがわかります。そういうわけで、日本でライティング・センターはどういうことをしたらいいんだろうということを今日、考えたいのです。

まず、アメリカにおける文章作成指導を見てみたいと思います。先程、ガリー先生がアメリカのライティング・センターの歴史を言ってくださったのですけれども、皆さんにここでクイズです。日本の小学校の玄関や廊下でよく見る掲示は何でしょう。（…間…）私は「廊下は静かに歩きましょう」というのをよく見るんですけども、皆さんどうですか。これは規則を守ろうということですね。それから共通のルールをみんなで守ろうという、そういう教育理念が反映されている掲示ではないかと思います。アメリカの小学校の玄関や廊下でよく見る掲示は何でしょうか。（…間…）私がよく見たのは、これなんですね。「You are Special!」という大きな掲示があるんです。かけがえのない自分を大切にしよう。大切な自分です、と。個人の個。一人ひとりを育てるという理念が反映されていると思います。私自身も半分アメリカで小学校を過ごしたし、それから自分の子どももアメリカの小学校に通ったのですが、実際にこの掲示はたくさんの学校で見ました。

今日、ちょっとこの社会的背景、「You are Special!」の社会的背景を考えたいと思います。トム先生や高橋先生のほうが、私よりよく講義されると思うんですけども、アメリカでは1900年代の初めに農業社会から工業社会へ移ったわけです。たくさんの方が都市部に雇用されていった。公教育費は自治体が賄っていたんですけど、そうになるとアンバランスが出てきて、自治体によっては教育にかかる費用に不公平が生まれたというわけです。それで、学校財政の配分を、そのときに州政府が果たすべき義務はできる限り高度な最低

限のよい教育を全ての子どもに保障することであるということが発表されたのです。

刈谷剛彦先生によると、産業の効率化の原理と教育の科学的方法が学校教育にも浸透して、そして教育における平等という概念に個というものが単位として添えられたというふうにあります。この一つの例で、私がおもしろいなと思ったのは、アメリカでは教員の労働力を測定する単位に＜生徒時＞というのがある、「受け持っている生徒数×教えた時間」で教員の労働をはかることです。今日そこに座っている太田先生と私は、先ほどの初年次生向けの授業では 1 学期間に 3,000 人の学生を教えるんです。すごい大金持ちになれるなど、こここのところを読んだときに思ったんですけれども、こういうふうを考えるそうです。

さらに、進歩主義教育が台頭したわけですね。スタンレー・ホール、ジョン・デューイ、キルパトリックがいろいろ提唱して、個の能力やペースに合わせた教育が平等ですぐれた教育だという理念がアメリカにだんだん浸透していったという歴史があります。

アメリカの小学校で、これよく見る風景なんですけれども、到達度別グループ学習がなされます。いわゆるトラッキングですね。先生が真ん中に黒板で書いていますけど、これだけの小グループで、このグループの人たちは同じぐらいの能力でグループを組まされるわけです。先生はここにいてこの人たちの面倒を見ている。では、ほかの生徒たちは何しているんだろうって思いますけれども、彼らは自習をしてるんですね。黒板に課題が書いてあって、ずっと自分で自分のペースで先生にグループで呼ばれるまで勉強してるわけなんです。私もこういう中で小学校に行きましたが、すごく自分のペースで何でもできるんです。そういう心地よさというのを感じました。

どうしてこれが可能なのかということの一つの要因は、時間割です。これ小学校の典型的な時間

割なんですけども、午前中はメインストリーム・クラスルームで、ずっと担任の先生が 8 時半から 12 時までクラスの子どもと一緒にいて、読み書きそろばんをやるんです。ですから、このトラッキング・グループワークができるのです。午後から体育だとか社会とか理科とかをやる自由に時間がゆったりと使えるのです。

これが文章作成指導にも反映されたわけです。先程、ギャリー先生がおっしゃったように、1980 年ぐらいに Writing as a Process Movement が起きて、とにかく文章作成はプロセスで指導するのが一番いいんだという運動が全米に広がりました。何について書くかを選ぶ段階でコンファレンス——このコンファレンスというのは先生が生徒一人ひとりと面談をするんですね、教室の中で。それから、どのような種類の文章を書くか選んで、マップなどで構想を練る。構想を練るときにまた先生と生徒が面談をする。下書きをする。それも面談をする。書き直す。清書する。こういうふうにプロセスで文章を見ていくということが全米に広がりました。実は、日本にもこれありますよね。生活綴方運動ではこのようなプロセスで指導する方法が日本中に広がりましたけれども、今は余り行われていないと思います。

もう一つ、アメリカの特徴は学級の人数だと思うのです。20 人学級なんです。うらやましいですね。そして、25 人以上になると、もう副担任がつきます。私が日本の小学生のころ、出席番号が 54 番という人がいました。すごい大クラスだったと思うんです。けれども 20 人だと教師が机間巡視をして各児童と 2 分ずつ話しても 40 分でできますね。こういう環境の中でプロセスで文章を指導する方が可能になっていくのだと思います。

もう一つ、特徴的だと思ったことは参考文献を明示させる指導です。

アメリカでは、何年生で参考文献を挙げさせるか。クイズです。どのぐらいだと思いますか。2

年生で作成させているところを見ました。イリノイ州でライブラリーという授業があるんですけども、これ図書館です。ライブラリーの先生が本を読ませてレポートを書かせるんです。これはその授業で、僭越ながら私の息子が書いたレポートなんですけれども、『ポーラ・ベア』というものを書きました。これ 7 ページ、10 ページですか、まだ 3 年生ですから本当に基本的な単語で書かれているレポートですけども、この最後の 2 ページに、ビブリオグラフィーとしてちゃんと参考文献が 2 つ載っているんです。よく見るとビブリオグラフィーのスペルが間違っています。でも、この授業も見たんですけども、先生が絵本のような動物の本を、ここにタイトルが書いてあるでしょう、ここに作者があるでしょう、表紙をめくると発行年がここに書いてあるのよと言って指導してこの参考文献表を書かせていました。

それから、高校の授業を見学させてもらったことがあります。カードを使ったレポート作成指導というのをしていました。この先生は、まず文献カードというものを用意させて、本、雑誌、新聞、年鑑、辞書、事典に広く当たってどんな文献なのかをカードに書く。何に使える文献なのかを書かせる。この文献カードを週に 6 冊以上分提出させていたんです。一つのレポートを書くために全部で 50 以上の文献を高校生に読ませていました。それができたら今度は引用カード、誰がどの文献で何と述べているのかの引用箇所をカードに書かせて、どういうふうに利用できるかを書かせて、これを週に 18 枚以上という宿題が出ていたんです。ですから、このレポート一つ書くのに、学生は 200 枚以上の引用カードをつくっていました。

これが図書館で学生たちが雑誌を読んでいるところで、この真ん中の男の子が机の上に置いている箱がありますね。この中に引用カードと文献カードが入っていて、すごく大事そうにこれを持って歩いていました。最後には、それをグループ分

けて、どういう順番でどういうカテゴリにしてレポートに組み込むかということ、アメリカ人って何でも床の上でやりますよね、座って女の子が分類しているところです。

それから、資料 1 をご覧ください。アメリカでは、小さいうちから文章の種類、それぞれの特徴をすごく明示的に指導しているということがあると思います。1 枚目は、4 年生のモフェットという人の実践なんですけれども、「インタビュー・スケッチ」というところに波線を引きました。ここにこんな指示が出てるんです。「その人が実際に言ったことの引用と、インタビューをした後その人の言ったことを自分の言葉で言いかえたものと混ぜて報告する。インタビューの報告の順序は、発言のとおりではなくて話題ごとに変えてよい。自分の質問は引用しない。」というふうに指示が書いてあるんです。

私、ここを読んですごくびっくりしたんです。大学 4 年生の卒論でみんなよくインタビューするんですが、その結果章の書き方のところで、まさしくこの 3 つのことを毎年毎年私は言っているんです、学生に。それを小学校 4 年で習っているんだなあと知ってびっくりしました。隣のページにはプレイ・スクリプトなどありますけれども、この本にはこういう文章の種類ごとの特徴を説明したものが 50 種類ぐらい載っていました。

すごく駆け足なんですけれども、ここでアメリカの文章作成指導のまとめを言いますと、とにかく個別指導に教師も生徒も慣れているということが言えると思います。それから、過程での指導に教師も生徒も全く違和感がないと思います。また、文章の種類によって書き方が異なることを明示的に指導しています。それから、生徒がアカデミック・ライティングの経験を積んでから大学に入ってきているということがわかります。こうした状況の中でライティング・センターが誕生して、そして今も存在しているんだということになると思

います。

では、ここからは日本における文章作成指導を見てまいります。

資料の 2 をご覧になってください。先程の裏側です。今、光村図書は中学も小学校も日本の子ども 3 人に 2 人は使っているということなので、光村の指導書の系統図をコピーしてきました。これは書くことの系統図なんですけれども、学年が進むにつれて、だんだん書く回数が減っているということがこの系統図からわかると思います。それから、一番下の 3 年生、説明・紹介をする文章はもう 3 年生では出てこなくて、批判文だけになっています。書く量が圧倒的に少ないのではないかと感じてしまいます。

それから、多様な文章の種類についてもあまり子どもたちは理解していないかもしれないということがわかります。この最後にあった批評文、すみません、これスライドを間違えてしまいまして、批評文でした。批評文を書くところの單元では実際にどんなことが教えられているかということ資料 3 で見てみたいと思います。

あまり詳しく言っている時間がないので、簡単に申し上げます。この単元のページ全部をコピーしてきたんですけれども、テレビを見ている絵の左側に「批評文について知ろう」というところに四角囲みで載っているこの作文が生徒の作例ですね。いわゆる模範文章として教科書に載っている文章なんですけど、そこをご覧になると、終わりから 5 行目に引用があります。「池上彰のメディア・リテラシー入門にもテレビ番組がさまざまな仕掛けをしていることもあるので全てを編集されているという自覚を持つように。」とあり、受動的な姿勢への注意が促されているというふうに作文に書いてあるわけですね。引用があるわけなんですけれども、何と参考文献表がない。それから、どこのページから引用したのかという表示もないんですね。これは模範文章として出ている

ので、あちよつとここのところが不十分だなということを感じました。

この単元を読んでいくと、立場を決めるためにたくさんの文献に当たることはあまり奨励されていないということがわかります。それから、自分の文章に文献をどう組み込むかという引用の方法ですとか、出典の明示の方法までは指導されていないんですね。でも引用はすると良いというようなことが書いてあります。一つの指導の例でした。

筑波大学の島田先生が、高校における文章作成指導の経験について学生に調査したことが先生の本に出ています。国語の授業で高校 3 年間で何回ぐらい 400 字以上の文章を書きましたかという質問紙調査で、こういう結果だったというんです。何とゼロ回と答えた人が 4 割以上、1 回から 3 回が 2.2 割で、合計して 6 割の学生さんが 3 年間で 3 回しか書いていないと答えたというのです。愕然としてしまいます。とにかく高校においてもやはり書く量が圧倒的に少ないのではないかと考えられます。

でも、小論文を課す大学がふえてきていて、大学入試に向けては日本人の子どもは小論文の指導を受けていると思うんです。『小論文演習ノート』、これ 36 版なのですごく売れているワーク帳の一つだと思うんですけれども、その資料 4 をご覧ください。

これも模範文章として載っていた文章なんですけど、下のほうに波線をつけたところですね、「これらの悲劇の直接的な原因は内戦や干ばつであったかもしれないが、人口問題がかかわっていることは確かである」と書いてあるんです。ああ、確かであるなんて本当にそうと言えるのか、誰がそう言ったのか、こんなふうに断言していいのかなとははらします。

それから、隣左側に矢印のところ、そのうちの 90% が途上国の数だという、この予想どおりになればというふうに数字が出てくるんですね。そ

して、一番最後を見てください。欄外に批評が出ているんですけども、2 文目、「論旨も一貫し、具体的な数字を挙げたのも説得力を高める働きをしている」と。つまり誉めているわけなんです。けれども、字数を挙げて、これ国連人口基金の予測によると書いてあるんですけども、出典、調査元は示されていない。そして、ガンジーのところは非常に歴史上の有名な重要な提言について書いてあるんですけど引用がない。こういう小論文指導が見られます。

ここで、日本の文章指導をまとめたいと思います。つまり、大学のライティング・センターを利用している書き手たちはどういう状況なのかということですけども、中学、高校の国語科授業であまり文章を書く経験はしてない、乏しい。それから、個別指導を受けた経験がほとんどないと思います。それから、多くの文献を読んだ上で立場を構築するという指導は受けていない、場当たりに文献を使ってしまうというのがあると思います。それから、文章の種類ごとにある書き方の特徴を十分に理解しているとは言えないと言えます。それから、文献を参照する仕方や提示する仕方についても適切な指導を受けてないので、誤った認識すら持っている、こういうことが言えると思います。

そこで、日本のライティング・センターに求められる役割を整理したいと思います。

まず、期待される一つ目は、学問を行う姿勢と連動した文章作成を教えることが必要だろうと思います。文献を広く多く読んで自分の主張を表すことを奨励していく。それから、読んだものに即して検討する。引用してしっかりそれに即して批判をしていく。そしてわかりやすく伝えるための技能を伝えるということをライティング・センターがしていかなければいけないのかなと思います。

もう一つの期待、アカデミックライティングには特定の技能があるということを理解してもらう。

アカデミック・ライティングというのは、たくさん種類の文章のうちの一つで、それには特徴的な技能がある。そして、技能そのものも説明しなくてはならないと、先程関西大学さんのパネル発表でありましたけれども、技能そのものの説明もしなくてはならない。それから、文章を検討していくための観点を幾つか知るだけで文章をよくしていくことができるんだというふうに伝えることも、ライティング・センターの役割かと思います。

最後三つ目は、過程で人が介入して行う文章修正に対して達成感を与える。書いている途中で人に見せることはよいことだと伝える。人の意見を介在させて書き直すことはよいことだと伝える。何度でも書き直して文章をよくしていくことができるんだと励ましていく。こういうことも必要かと思います。

ただ、私は国語教育に携わっているので、ライティング・センターだけに頼ってはいけなあと反省しております。やはり小・中・高で積み上げていくことが大切で、小学校からもっとやれることがあるんじゃないかと思って、文句ばかり言ってきたので。

資料 5 をごらんください。これは光村図書の小学校の 3 年生の教材なんですけれども、現行の教科書から引用を小学校 3 年で入れるようになっています。そして、非常に初歩的なんですけど参考文献も書かせるようにしてみました。

というわけで、トム・ギャリー先生のお話にもあったように、アメリカで発足したライティング・センターの理念、これは書き手への個別支援であったり書き手の意図を最大限に尊重するという、そこはすばらしいことだと思うので、きっちり日本で踏襲していくのがよいのではないかと私は思っています。ですけど、日本で育った書き手特有の状況があるということも現実なので、それをよく把握して、調整をしていくということが日本のライティング・センターには求められるの

シンポジウム議事録

シンポジウム「ライティングセンター 日本の現状と課題」

平成 25 年 3 月 16 日（土）13：00～17：30

ではないかなと思うんです。そして、やっぱりライティング・センターは日本人にはなかなかなじみにくいものなので、その機能と有効性をよく教員と学生に周知していくということもライティング・センターの役割だと思っています。

ですから、明日の発表、ライティング・センターをたくさん見てこられた発表があるそうで、私はそれを聞かせていただくのをすごく楽しみにしています。日本ではアメリカにおけるライティング・センターとはちょっと違う経緯の発展があってもいいのではないかなと思うんです。日本独自のあり方をこれからこの会場にお集まりの皆さんで模索していくのがよいのではないかなと思っています。

以上です。御清聴ありがとうございました。